

大原社会問題研究所の設立と米田庄太郎

田 中 和 男

はじめに

一八九〇年代初頭、竹越与三郎は『新日本史』を著し、明治国家の形成を「乱世的革命」の結実として描き出した。彼が生きる時代は、特権的な階級が他の階級を支配する時代が終わり「上に政府あり、下に人民あり、人民と政府と国民を組織する」時代^①とした。士農工商の下に置かれた「穢多非人^{マヤ}を廃して平民に列せしめ、免租を止め」ることで平民と同等とされ、士族や、貴族は存在するもののその特権を失った。「士族、平民の人為的階級が已に政治的意義を失すると共に、士農工商なる文字が階級の意義を失すると共に、新奇なる社会は自然に起れり。余はこれを階級といわずこれを社会という。一個人はこの社会を通して以て国家に係るものなり」。国家は国民が一個人として直接に形成するのではなく、基督教会、仏教団体、政社、商社、農談会、文学会、青年会など「万人協同の精神を以て相交わ」る

中間団体の一員として国家に帰属することになった、という。^③ 青年竹越によって、国家と個人の間には存在すると考えられた「社会」（複数）の誕生^④、社会の発見が、鋭く意識されている。

竹越によれば維新以降の「政治上の変化已に遂ぐるや、延いて社会上に大激変を加えずんば已まざるの運命を有した」のであった。^④ この変化に対応して、新しい日本の政治にとつての課題が、諸社会の利害や主張を調整・序列化することにあることが予感されている。いわゆる「国家政治」から「社会政治」への変質である。^⑤ 実際、一八九〇年代、日本の近代化・工業化の歪みは明確になっていった。社会問題の発生である。松原岩五郎や横山源之助などジャーナリストによる貧民窟の探訪が行われ、貧富の懸隔、都市問題が解決すべき問題として、言論世界・学界・政界の中で論じられるようになる。石井十次によって岡山孤児院（一八八七年）、留岡幸助によって家庭学校（一八九九年）など先駆的な社会事業のいくつか、一九世紀の後半に創設されていく。^⑥

勿論、社会の様々な問題に対して調査や、研究が進み、政府レベルでも組織的、制度的な対応がされるのは二〇世紀に入った一九一〇年代と比べてよいであろう。縮小されていた救貧行政を補完するための貧病者救済のための済生会が天皇の下賜金を基礎として創設されたり、貧民とは違う階層として位置づけられた労働者の労働条件の改善を図る工場法の制定された一九一一年はその象徴である。一九一八年の米騒動直前には、内務大臣の下に救済事業調査会が設置された。学界の状況を見ると、社会政策学会の活動が再機動し、その中から経済学や統計学が分離してその学問的方法・理論を確立していった。法学部に属していた経済学が独自の学部を持つようとしていく。竹越のいう様々な社会を統括するより大きな社会（The 社会）を研究する社会学もその地位を確立しようとし始めていった。^⑦ 時代の要請に応えるべく、日本社会の様々な様相を調査・研究していった。

この動向の中で、特徴ある研究所が大阪に創設される。一九一九年の二月に開所式を行った大原社会問題研究所（以

下では「大原社研」と略す場合がある⁸⁾である。倉敷紡績会社の社長・大原孫三郎の私的な経済支援で運営される民間・在野の研究機関であった。開会式には、後に所長に就任する東京帝国大学教授の経済学・統計学者高野岩三郎、社会事業の先達であり大阪府嘱託・小河滋次郎、京都帝国大学教授・河田嗣郎、同じ京都帝国大学の非常勤講師で社会学者の米田庄太郎が参加していた。高野は東京帝国大学法科大学の中から経済学部を独立させたばかりであった。その他、社会事業、労働科学の専門家である高田慎吾、暉峻義等、新進経済学者で京都帝国大学教授河上肇も参加が予定されていた。米騒動・第一次大戦終結以降の社会問題の実態を解明し解決の糸口を探るために設立された研究所は、経済学、社会政策、労働科学、ソーシヤルワーク、社会学といったバラエティに富んだ専門家が関与することになった。その中でも、高野や米田、河田がリーダーの役割を果たすことが期待されていた。

しかし、その後の高野を巡る状況の変化が、当初の役割分担を大きく変えてしまう。一九一九年から二〇年にかけて、国際労働会議の労働者側の代表として高野が政府によって任命されたことに労働側の反発が強まったため、高野はその責任を取り東大教授の辞表を提出し退職した。そのお陰で、高野は全力を大原社研の運営と研究に注ぐことができるようになった。その直後の東大経済学部での森戸辰男のクロポトキン論文を巡る言論抑圧は、高野門下の東大関係者の退職者、退職者を発生させ、彼らが大原社研の中心に集まることになった。こうした動きは、大原社研の歴史にとっては、豊かな研究成果をもたらす条件となったことは確かであろう。一九三六年、大原孫三郎の財政的支援を失った後も、大原社研が本拠地を東京に移して、現在まで続く歴史を持ちえたのは、高野や彼の周辺の高野シユレの努力を無視することができない。例えば、櫛田民藏、大内兵衛、久留間鮫造、権田保之助などである。創設期の大原社研が持った様々な方向性が、マルクス主義のとりわけ労農派的な経済学・労働問題に焦点が絞られていく⁹⁾。暉峻義等の労働科学は、大原の意向もあり、早々と倉敷に分離された。救済事業・社会事業の流れは、リーダーであった小河滋次郎、高田慎吾の

死去などで、大林宗嗣はしばらく残っていたが、担い手が少なくなっていた。社会事業年鑑なども廃刊されてしまう（一九二六年）。社会学者の米田庄太郎も、開所直後に京大の専任講師（一九一九年五月）・教授（二〇〇年七月）に就任するなど、高野派の勢力に押されるようにして、大原社研を離れ、自らの研究に専念していった。しかし、この動きの中で大原社会問題研究所の創設時の意図と可能性が失われたり、隠れてしまったのではないだろうか。

拙論「二〇世紀初頭の同志社と米田庄太郎」において、一九〇二年から一四年の同志社時代を中心にして米田庄太郎の経歴・行動と思想基盤について概観をした。その中で、奈良市郊外の被差別部落に生まれた米田が、洗礼を受けたキリスト教（聖公会）の司祭（ドーマン）の好意によりアメリカ合衆国に留学する機会が与えられたこと、神学校とコロンビア大学・大学院在学中に、自らの天職が神学に依拠したキリスト教宣教ではなく、平信徒として社会学の研鑽することにありと自覚したこと、社会学の対象とする「社会」が差異を含みこんだ心理的人間関係にあることを発見し、そこに差別を克服する契機を感じ取ったこと、帰国後、同志社に勤務する中でも、社会学研究により実力を確保することで、自覚的に記しているわけではないが、出自に関するあれこれの風評・言辞に対抗しようとしたことなどを、不十分ながら検討した。¹⁰⁾

本稿の課題は、米田が大きく関わった大原社研の設立時期に焦点を縛り、経済支援を行った大原孫三郎の構想、米田、河上肇、高野岩三郎など主要な参加者の意図と社研創設の経緯、高野派の勢力増大に押されて米田が離脱するいきさつなどを、関係者の自伝や証言を突き合わせることによって、検討することにある。前稿でもそうであったが、大原社研との関係について、米田本人が直接語った論稿・文章はないに等しい。関係者の証言でも、米田の存在は軽視されるように思われる。実際、公刊された大原社研の歴史を研究した書物にも、米田の名前は殆ど出てこない。従って基本的事実を発掘・確認しながら、大原社研の創設の過程を再構築していきたい。その中で、米田のこの時期の思想の展開

の一端にも簡単ながら触れていくことにしよう。出自に係わる部落問題についての米田の論説も検討したい。¹⁾

- (1) 竹越与三郎(校注・西田毅)『新日本史(下)』(岩波書店、二〇〇五年) 一一五頁。原本は一八九一―一九二二年、民友社から刊行された。本書については、岩波文庫版の西田毅「解説」を参照。
- (2) 竹越、同右、五七頁。賤称廃止令と地租改正については上杉聡『明治維新と賤民解放令』(解放出版社、一九九〇年)。
- (3) 竹越、同右、一一五―一六頁。
- (4) 竹腰、同右、六二頁。
- (5) 岡利郎「近代日本における社会政策思想の形成と展開(一)」「思想」五五八号(一九七〇年)。大正期の「社会の発見」については有馬宇『国際化』の中の帝国日本』(中央公論社、一九九九年)、酒井哲哉の一連の論文を参照。酒井哲哉「国際関係論と『忘れられた社会主義』」「思想」九四五号(二〇〇三年) など。
- (6) 一八九〇年代以降の貧民窟探訪については、西田毅ほか編『民友社とその時代』(ミネルヴァ書房、二〇〇三年) 所収の田中和男「民友社と『探訪』ルポルターージュ」で簡単に触れている。また、社会問題の発生、社会事業の創設については、菊池正治ほか『日本社会福祉の歴史』(ミネルヴァ書房、二〇〇三年)、小澤考人「近代日本における社会問題の出現とその効果」『社会政策研究』第六号(二〇〇六年) 参照。
- (7) 二〇世紀初頭の社会学の確立過程については川合隆男『近代日本社会学の展開』(恒星社更生閣、二〇〇三年)。
- (8) 大原社研の成立経緯を含む歴史については法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所三十年史』(同研究所、一九五四年)、同編『大原社会問題研究所五十年史』(法政大学出版局、一九七一年)、大原孫三郎伝刊行会『大原孫三郎伝』(中央公論事業出版、一九八三年)、大島清『高野岩三郎伝』(岩波書店、一九六八年) 参照。
- (9) 大原社研の経済学的方法論が、すべてマルクス主義や労農派的マルクス主義に収斂したわけではない。講座派に対する労農派の対抗も、本稿が対象とする時代より後のことである。ここでは大内兵衛や楠田民蔵、初期に参加する宇野弘蔵などの存在が想定されている。大内兵衛『私の履歴書』(河出書房、一九五五年)、宇野弘蔵『資本論五十年』(法政大学出版局、一九六五年)。
- (10) 田中和男「二〇世紀初頭の同志社と米田庄太郎」『キリスト教社会問題研究』五三三号(二〇〇四年)。米田の若き日の奈良基督教教会のドーマン(Isaac Doorman) などの交友、影響関係などについては、田中和男「社会学者 米田庄太郎の青春」『種智院大学研究紀要』七号(二〇〇六年) 参照。

〔11〕 近年の研究書である高橋彦博『戦間期日本の研究センター』（柏書房、二〇〇一年）は現在の大原社研関係者の手になる、大原社研と協働の関係を対象とした研究成果であるが、そこには米田庄太郎の名はない。但し、本稿のテーマとの関係で興味深い指摘として、社研設立の前身研究の課題の一つに、社研の建物が設立された周辺の貧民窟と被差別部落との関係はどうか、を挙げていることである。四三頁。本稿では、大原社研の成立と部落問題の係わりも視野に入れる。

一 大原社会問題研究所設立の経緯―大原孫三郎の構想

大原社会問題研究所の創設に自らの私財を投じたのは、倉敷紡績会社社長であった大原孫三郎である。^{〔1〕} 久留間鯨造は高野の弟子であり、友人の父（林源十郎）が大原の先輩であり、その関係で大原社研の役員となり、高野の後には所長として社研の活動をリードした。^{〔2〕} 彼は、設立準備中に大原に面談し、「計画の概要」の説明を受けている。「自分がかねがね、親からゆずられた以外の、自分でつくった財産は、むすこには残さないと、全部社会的な事業に使ってしまうつもりである、それで、今でも多少そういうことをして来たが。最近社会問題を、政府の都合などに左右されないで、根本的に研究する施設が必要なることを感じるようになったので、今度はいままではちがつて、かなりの決意をもって、そのために寄附しようと思っている……研究所の運営は適当な学者にお願いしてやっていたたくつもりで、一たんお願しいたし以上は、自分は絶対容喙しないつもり」と大原は言ったという。久留間は、大原の決心の背後に、岡山の石井十次が経営した「（岡山）孤児院の世話をしたり（大阪の石井記念）愛染園をやったりしているうちに、大原氏はしだいに、そういうことは、いわば膏葉をはるような、対症療法にすぎぬ、もつと根本な社会問題の研究の必要がある、というふうに考えるようになっていたらしい」と推測している。^{〔3〕}

久留間の推測が一面では間違っていないのは、大原の残した発言からも確認できる。久留間も紹介しているように、

青年時代に「大変な道楽者」であつた大原が、キリスト教の洗礼を受け、まっとうな経営者に生まれ変わったのも、石井十次との出会いを抜きにしてはありえなかつた。放蕩者の改心を経験した後の決心を、一九〇二年の正月早々、大原は日記に記していた。「この五年間のことを顧みれば実に恥かしく感ぜざるを得ない。然るに昨年は、二十世紀の第一年に於て、余の心靈上に大なる改良を加えさせ賜うたのであるから、この二十世紀は余にとつて改革の世紀であると思ふ。……余は教育に政治に又宗教に神の心の如く改革して、憐れむべき国民を救い出さんとするものである」⁽⁴⁾。心霊の改良と憐れむべき国民の救う社会の改良が「余の天職」と自覚するのは神から与えられた富者の社会的責任の自覚でもあつた。「金のある家に生まれた者はそれだけ責任が重い。神の御心に依り、金のある家に生まれしめ賜うたる余は、其金の使用法は必ず神の御心に叶うようにせねばならぬ」⁽⁵⁾（三月七日）。

エリート意識を含んだ特権者の責任観（ノブレス・オブリジエ）に基づいて石井の様々な活動を支援し、倉敷キリスト教会の立ち上げ、倉敷日曜講演会の開催などにも力を尽くした⁽⁶⁾。石井の活動については、石井の死後、岡山孤児院の院長に就任したり、大阪のセツルメント活動である愛染園についてもその運営に係わつている。しかし、その中で石井の方法に対する批判的な考えも懷き出している。それは、久留間が推測する「対症療法」との評価とも少し違つた、社会事業（社会運動）の実践者に対するかなり根本的な批判であつた。例えば、一九一七年、岡山孤児院創設三〇年を迎え、石井の胸像が出来上がった記念式で、大原は次のような発言をしている。

「従来孤児院の関係者は、子供に自分は孤児であるといふ感じを強く作りました。孤児院に入ります子供は勿論気の毒な子供でありませうけれども、その将来の為を計り、将来の幸福を祈るものが出来たならば、それで幸福の生涯に入つた筈であります。されば誘掖者は子供をして幸福であるといふ感謝の念を起さしめるやうにしなければならぬ。今迄は社会にも孤

児院の子供をして一種不快な念を持たせるやうな取扱上の欠点があつたが、どうか子供の社会的地位を向上させ、子供を真に幸福な生涯に入らせるやうにしてやりたい」。

ここには、孤児を救済する施設の中での孤児を孤児として取り扱う姿勢と、施設の外の社会が、孤児を孤児として排除する共犯関係が鋭く剔抉されている。両者が孤児を哀れな孤児として構築していった。⁽⁸⁾二十年後の大原の石井についての講演でも、石井が孤児院を創設し、キリスト教に片寄る宗教教育をしたことに疑問を投げかけ、「孤児院を拵へることは一種の特殊階級を造るのである。不幸者を不幸として、自覚を与へることは、其の印象を強くすると云ふことは、良くない」とし、孤児たちにも「自分達の生涯は、人は同情して呉れるものだ」と云ふ考⁽⁹⁾を持たせたと批判した。これは石井の方法への懐疑であるとともに、「憐れむべき国民を救」うという大原自身のエリート主義・パターナリズムへの反省でもあつたであろう。

社会福祉実践のパターナリズムと社会が持つ排除／差別構造が、対象とされた人々の主体性に対する管理／内面支配の可能性を持つことへの先駆的に認識が、大原によって示されている。⁽¹⁰⁾支配／管理に対して、共同／協調が求められていく。例えば、大原社研の設立も「国民の救済」には係わるが「先づ以て社会問題なるものの真意義を探求し、其の諸方面に関して学術的なる研究を行ひ、特に我国の於ける實際状態を調査して、堅固なる基礎の上に立脚して問題解決の一端に資する」という一歩引いた目標が挙げられていた。⁽¹¹⁾国民の生活改善の前提として、大原の足元にある、倉敷紡績会社の労働者、倉敷という地域の住民の生活改善の重要性が認識されている。「著しく劣悪、悲惨」な状態に置かれてある工場内の「職工の人々を生産の道具として使役することはまちがいである。働きにくる人も、また生産経営を行う資本家も双方ともに偏せざる利益を得て事業を遂行」することが必要とされた。⁽¹²⁾勿論、大原の経営が自身が理想として

描く「労使協調」によって行われたとしても、そこに対立と擽取がなかったわけではない。大原社研を初めとする社会的貢献の事業へ投ぜられた多大の資金は、倉敷紡績会社などの労働者の労働によって確保されたものであり、労働者の利益に直接には還元されていないものであった。しかし、大原の意識においては、社会問題の調査・解決は間接的には労働者／国民の利益であるし、労使を含む国民の共同／協調の実践であった。大原の構想では、倉敷紡績会社に設けられた病院や託児所、娯楽施設も、労使協調の実践であるばかりではなく、「工場内労働者に対してのみならず他の一般労働者に対してもこれを開放」することによって地域との共同／協調の役割を果たすことが期待された。一九一八年に倉敷にも広がった米騒動に対しては率先して寄付を行い、一九二〇年には部落問題の融和的な解決を目指す岡山県協会の会長に就任するなど、徐々に被差別民によって解決が求められ出した部落問題への取り組みにも積極的であった。¹⁵ ここにも、地域社会での部落民／一般民の間に引かれた境界線を打破して共同／協調しようとする大原の姿勢が窺える。¹⁵

こうした思想的基盤を背景にして、石井十次が死去した後、岡山孤児院の経営を引き継いだ大原は、一九一六年頃から、貧困などの社会問題の解決には、石井十次のように孤児を個々・事後的に救済する救済ではなく、社会的・予防的に対応する防貧が必要だと感じ、その具体的方法を研究する施設の設立を構想する。既に石井記念愛染園内に、小河滋次郎を中心とする救済事業研究室を設けている。内務省救護課嘱託の高田慎吾を招いた。¹⁶ それを拡大した研究所の設立であった。米騒動が一段落した一九一八年秋には、その指導者となる研究者の選択を含めて、いくつかの人脈を通してコンタクトを取ろうとした。九月に上京した大原は、石井の支援者でもあるジャーナリスト徳富蘇峰を通して京都帝国大学法科大学の河田嗣郎を紹介された。河田は以前『国民新聞』に関係していたが、大原も河田の留学に対して経済援助も行なっていた。¹⁷ 倉敷日曜講演会にも何度か講演した京都帝国大学元教授で教育学者・谷本富を通して、米田庄太郎

が紹介された¹⁸⁾。大原の母校・東京専門学校の関係者として早稲田大学教授・北沢新次郎が推薦され(浮田和民を通してと北沢は言う)¹⁹⁾、大原の遠縁で優生学者(東京帝国大学教授)の永井潜を通して、暉峻義等が紹介された。九月下旬には、大阪の愛染園で第一回相談会が開かれた。大原、小河滋次郎、高田慎吾、河田、米田、暉峻が参加した。河田は一月月の相談会で同僚で、『貧乏物語』の著者として有名になりだした河上肇を適任として提案し、大原は河上と会見する。河上は自分は適任ではないとして、替わりに東大の高野岩三郎を紹介し、大原が上京して高野と会見するのが一九一九年一月一二日。高野の大原社研への関与が本格化する²⁰⁾。

準備段階の中では大原の米田に対する期待は大きかったと考えられる。先の趣旨書の草稿を米田が書いたといわれること²¹⁾、大原の人事構想でも、理事に小河と米田をあて、河田と河上を囑託としていたことにも現れている²²⁾。しかし、高野の登場で、最初の構想が変化していく。一九一九年二月九日、愛染園で大原社会問題研究所の開所式が行われ、河田・米田・高野のトロイカ指導体制が出発した。別組織として、同月一三日には、大原社会事業研究所の創立総会が開かれ、こちらは小河・高田が委員となつて指導することになった。しかし、六月には二つの研究所を統合して大原社会問題研究所とし、第一部が労働問題、第二部が社会事業を扱うこととしたが、対象とする社会問題は大きく労働問題に傾斜したともいえるが、創設時の五人の委員を評議員として共同指導体制を引いた。労働問題の分野では研究員として、高野のラインからは久留間鮫造が採用されて統計協会内に開設された東京事務所消費組合の調査を始めた。米田のラインからは東大の社会学講座(建部遜吾が教授)の助手であった戸田貞三が採用され、労働年鑑の編集などを行った(翌年三月戸田は退所し東京助教に復帰)²³⁾。研究囑託は、森戸辰男・榎田民蔵・北沢新次郎など東京関係者(榎田は河上の弟子でもある)、臨時囑託として京大関係者の銅直勇・高山義三などが就任した。東京と京都との勢力の配分にも考慮されているように思える²⁴⁾。

研究体制が次第に整備されて来た一九一九年一〇月、高野は前月の国際労働会議の代表問題の紛糾の責任を取り東大教授を辞任する。翌一九二〇年一月には「クロポトキンの社会思想」発表を巡る森戸事件の発生で、森戸辰男や大内兵衛が東大を休職となり、同時に高野門下の多数の研究者（助手など）が東大を離れた。こうした動きを背景にして、大原社研の内部での高野の役割が拡大・強化されることになる。三月、大阪で委員会を開き、二部制を廃止して、高野を所長、高田を幹事とすることが決定された。七月には愛染園から分離して建設された天王寺伶人町の新館開所式が開かれた。伶人町は聖徳太子が悲田院を開設したという伝説を持つ地域に隣接し、二〇世紀初頭には、聖徳太子の仏教思想に影響を受けたという岩田民次郎が大阪養老院を設けた地でもあった。²⁵同日の評議員会で図書収集のために榎田・久留間のヨーロッパ派遣が決定された。九月には、大内兵衛、細川嘉六、権田保之助、山名義鶴が研究嘱託に就任し、その間、植田たまよ、川西太一郎、林要、山村喬、丸岡重堯が助手に採用されるなど、高野派の人材が大原社研に結集していった。暉峻義等が中心となった労働衛生の分野は、大原孫三郎の工場経営（労務管理）の都合もあり、二〇年三月、二部制を廃止した時点で、暉峻が倉敷紡績の嘱託となり、一二月には分離されて、労働科学研究所の設立が企図されていく。このように、一九二〇年には、最初の組織とは変貌を示しながら、大きく研究体制が整えられていった。研究所の研究テーマが労働問題という経済的研究に特化されただけではなく、研究する人材においても高野を中心とするグループによって占められることになった。

(1) 大原孫三郎については、前掲『大原孫三郎伝』、大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』（日本図書センター、二〇〇四年）、兼田麗子『福祉実践にかけた先駆者たち』（藤原書店、二〇〇三年）。

(2) 久留間鮫造は創設時に研究員となり、榎田民蔵とともに書籍収集のため欧米に赴くなど社研の基礎を形成するにも大きな役割を果たした。以後、委員・理事・常務理事を務め、戦後は法政大学教授に就任するとともに、社研の法政大学との合併にも尽力し、一九六六年まで所長

を務めた。社研との関係については、久留間鯨造「四十五年間の思い出」『資料室報』（大原社研）一〇八号（一九六五年）などで語っているほか、「社会科学五〇年の証言・久留間鯨造」『エコノミスト』（一九七三年八月—一〇月）で七回にわたって、生涯について語った。

(3) 久留間鯨造「学生生活の思い出―大原社研とともに」『思想』三四九号（一九五三年）八五頁。

(4) 「大原孫三郎の日記」一九〇二年一月一日条、間宏編『財界人思想全集第五卷』（ダイヤモンド社、一九七〇年）二五九—六〇頁。

(5) 同右、三月七日条、二六一頁。

(6) 倉敷キリスト教会の創設と大原の関係は、『倉敷基督教会略史』（一九三五年）、倉敷日曜講演会については、大津寄、前掲書二五七—六二頁に詳しい。

(7) 銅像除幕式、岡山孤児院三〇周年の際の大原孫三郎の挨拶、前掲『大原孫三郎伝』所収、一二七頁。

(8) この問題について、田中和男「近代日本の福祉実践と国民統合」（法律文化社、二〇〇〇年）所収の「明治中期における少年非行への対応」を参照。構築主義的方法については上野加代子『児童虐待の社会学』（世界思想社、一九九六年）参照。

(9) 「大原孫三郎氏の石井十次に関する講演筆記」（同志社人文科学研究所蔵）三七—四二頁。細井勇による解題と復刻「石井十次に関する大原孫三郎の講演」『石井十次資料館研究紀要』七号（二〇〇六年）一一三頁。

(10) 福祉実践でのワーカーとクライエントの関係にある管理／内面支配の可能性があることについてはマーゴリン（中河・上野・足立訳）『ソーシャルワークの社会的構築』（明石書店、二〇〇三年）が興味深い。

(11) 「大原社会問題研究所設立趣意書」前掲『大原孫三郎伝』所収、一三七頁。

(12) 万寿工場参観者のための大原孫三郎の講演「倉敷は共同の働き場」（一九二三年）間編、前掲書所収、二六九頁。それ以前の一九一七年、倉敷紡績工場長会議での大原に発言にも「向上的人道主義即ち職工その人の人格を認めその幸福を増進するといふことは、実に私の労働問題解決に対する主張の根本主義であつて、同時に倉紡の職工待遇上の根本主旨である。そして、この主義主張は決して会社の利益と相反するものではなく、却つて会社の利益を増進するものであつて、この主張と会社の利益は必ず一致する」とある。前掲『大原孫三郎伝』二二九頁。間編、同右書所収、二六六頁は現代仮名遣い。

(13) 大原、同右「倉敷は共同の働き場」間編、前掲書。二七一頁。

(14) 米騒動の際の米販売資金七五〇〇〇円の寄付については大津寄、前掲書二七七頁。岡山協和会との関係については、同書二八二頁、白石正明「岡山水平社の成立について」『研究紀要（世界人権問題研究センター）』七号（二〇〇二年）。

- (15) 自己と他者との間に引かれる境界線については杉田敦『境界線の政治学』（岩波書店、二〇〇六年）の議論を参照。
- (16) 高田慎吾については吉田久一編『渡辺海旭・矢吹慶輝・小沢一・高田慎吾（社会福祉古典叢書）』（鳳書院、一九八二年）参照。
- (17) 河田嗣郎については、横井敏郎「明治末期における自由主義的社会政策論の二類型―河田嗣郎の家族制度論と国家観」『立命館大学人文科学研究所紀要』六五号（一九九六年）参照。河田は一九〇七年、京大卒後、国民新聞に入社し、翌年、河上肇と同時に京都大学法科大学講師に就任した。京大退職後、大阪商科大学（大阪市立大学）学長を勤めた。
- (18) 米田庄太郎については、奈良県立同和問題関係資料センター編『米田庄太郎』（一九九八年）、横井敏郎「戦前日本の社会学者米田庄太郎著作目録・略年表・参考資料・書誌」『立命館大学人文科学研究所紀要』七七号（二〇〇一年）など参照。
- (19) 北沢新次郎『歴史の歯車 回想八十年』（青木書店、一九六九年）。
- (20) 大島清、前掲『高野岩三郎伝』（岩波書店、一九六八年）。
- (21) 前掲『大原孫三郎伝』一三六頁。
- (22) 大津寄、前掲書、三〇一頁。同じ箇所指摘では、小河の予定年俸一五〇〇円、米田が二五〇〇円が予定された。五歳年下の吉野作造の一九一七年の東大教授としての収入が二〇八六円である（田澤晴子『吉野作造』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）一四三頁）のと比べても、米田の優遇の度合いが推察されよう。
- (23) 戸田貞二「学究生活の思い出」『思想』三三三三号（一九五三年）。
- (24) 銅直勇は、京都帝国大学社会学専攻で米田の指導を受けた。一九一八年卒業後、京都市勧業課救済係などを勤めて社研の研究囑託となった。後、京大大学院に戻り、成城学園、戦後の横浜国立大学などで、哲学・社会学の教授を務めた。
- (25) 大阪養老院については岩田徳子『礎石』（創元社、二〇〇二年）、山本啓太郎「大阪養老院の創設について」『社会事業史研究』一四号（一九八六年）参照。
- (26) 労働科学研究所と暉峻義等については、暉峻義等「回顧十五年」『労働科学研究』一三卷五号（一九三六年）、三浦豊彦『暉峻義等』（リポポート、一九九一年）参照。大原、前掲「倉敷は共同の働き場」二七二頁。

二 社研創設参加者の構想

社会問題の調査・研究機関の創設するという大原孫三郎の構想に賛同した人々は、どのような思想の下で、大原に協力することになったのか。この節では、その主だった人々の一九一九年前後の到達点を確認して置きたい。中心的には米田庄太郎、高野岩三郎であるが、まず、高野を紹介した河上肇について見ておきたい。

河上にとつての大原社研との係わりは、人道・博愛主義者からマルクス主義者への転回の生涯の中ではエピソードに過ぎないのである。^①『自叙伝』には大原社研に関する記述はない。櫛田民藏宛の自身の書簡に、櫛田の死後解題を付ける中で、河上の回想（自己弁護を含む）が語られていく。^②一九三九年のことであった。この時期の河上にとつては、日本共産党との関係に容疑を受けて収容されていた監獄から出た直後であり、日本共産党が忠誠の対象であったから、大原社研の中心グループは反党分派であるし、ブルジョア学問たる社会学者など、記憶に値しないということかもしれない。しかし、博愛主義者であった一九一九年前後の河上にとつては、資本家・大原の姿勢は興味深いものであったに違いない。河田が河上を推薦したのを受けて、河上は大原を京都に呼び出した、と河上は回顧している。同じ京大の河田、米田とともに京大の学生集会所で顔を合わせた。翌日、河上は大原を研究室に招いて、「現在の日本に於ける急務は、社会問題のための根本策に関する理解の普及、即ち社会主義的思想の普及である。此の事の爲めにならば、私は決して労を吝しむものはない」として、大原の資金提供と河上の研究との対等な「共同事業」なら協力するし、「金持の道楽仕事のお相伴」なら断るとした。しかし、河上は大原の姿勢に「道楽」を看取して、「先方は私を主任格にしたい積りであつたらしいが、私は一切之に関係することを断つた」という。^③

しかし、この回想には、後の時代から見た自己正当化があるように思われる。大原と会見した時点での河上にとつて

は、資本家による社会問題解決のための道徳的な努力は、たとえ「道楽」であっても拒否すべきものではなかったであろう。『貧乏物語』で河上が提案した方法でもあった。河上によれば、文明諸国における貧困の発生の原因は、貧民の怠惰などの道徳的不品行にあるだけでなく、富の分配の不平等など社会的な要素にある。富者の奢侈贅沢はその一つであった。その上で河上は貧富の隔絶を解決するための三つの方法を例示する。①「世の富者が自ら進んで一切の奢侈贅沢を廃止する」、②「何等かの方法を以て貧富の懸隔の甚だしきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差ならしむること」、③「各種の生産事業を私人の金儲仕事に一任し置くことなく、例へば軍備又は教育の如く、国家自ら担当する」ことであった。社会主義あるいは国家主義とでもいうべき、国家の積極的な経済介入による社会改革の前提として、富者の慈善家的行為が承認されていた。「私が重きを置く所は飽くまで、富者の奢侈廃止である」とまでいう河上にとつて、慈善事業や研究の奨励に財産をせおうとする大原の提案は拒否すべきものではなかったと考えられる。先に記したように、自分自身の積極的な関与は拒否したものの、高野を紹介し、高野が東大を辞職した際にも、大原社研への取り次ぎを河田を通して働きかけようとしたり、榊原らとの「悪因縁」により大原社研の研究嘱託や評議員にも就任するなど、大原社研との係わりはしばらく継続される^⑤。

大原社研の創設に大きく関与した一人が米田庄太郎であった。米田は、一九一四年、同志社教授を学内の学生騒動の責任を取って辞職し、一九〇七年以来の京都帝国大学の社会学講座の最初の担当者（非常勤講師）として、論壇でも徐々に発言の場を持つようになっていた。久留間は米田のことを「京大の先生で、当時次次に外国の新らしい社会思想を紹介するので有名だった」と書き記している^⑥。一九一五年発行の、当時は無名の賀川豊彦の『貧民心理の研究』の序文を米田が書いていることから、米田もまた、当時の社会問題とその解決の方法については並々ならぬ関心を抱いていたことが窺われる。キリスト者としても、早くから社会問題には注目していた。一九一〇年に、キリスト教青年会の機関

誌『開拓者』に「我国の社会問題と基督教」と題する論文を発表した。欧米から遅れている日本においては、「労働者階級の自覚心」の発達や、「団結力」による「生活状態の改善の努力」は見られず、その点では「労働問題」が「社会問題」となっていないのに対して、「今日の我国の社会に於て尤も惨憺たるものは新中等社会に属する教育ある人々」であるとして、「官公吏、教師、牧師会社員など、総て無資産にして月給にて生活する人」が社会問題の争点であると論じた。この階層が「健全な発達をなす」ことに「我国の将来」がかかっており、キリスト教は「経済的生活と精神的生活と共に健全に発達せんことを期する」必要がある。ここでも、心靈のみの救済を求めるキリスト教ではなく、「人本主義現世主義自由主義活動主義の基督教」が社会問題解決の「重要な又根本的なる勢力」とならねばならないと説いている⁷⁾。

大原社研の創設に関与する一九一八年一月には、米騒動の発生と第一次世界大戦終結の後の国内の社会問題を「講和問題と諸問題／新中産階級問題」と題して五回にわたって、『名古屋新聞』に掲載している。自らの研究が「日本に於ける社会問題に就て特別な研究を為さんとするもので、泰西の社会問題をそのまゝ、当て嵌めやうとするのではない」という⁸⁾。欧米と日本社会の型としての違いが前提にされる。普遍的欧米に対する日本の近代の特殊な型への関心が米田にはあった。欧米経験の長い米田が感じた欧米への違和感、あるいは米田自身のナショナルリズムの問題も考慮する必要がある⁹⁾。欧米の研究は日本理解の「参考」に過ぎない。その上で、日本の現状ではヨーロッパとは異なり労働問題が社会問題の中心ではなく「中産階級中の智識階級、即ち新中産階級者」の「生活の不安」がそうであるとした。欧米においては、資本家の「横暴跋扈」がありそれを抑制する「労働者の対抗運動」が発生する。日本でも日露戦争以降、資本主義は発展しているが、「資本家の儲ける時代は労働者の儲ける時代」という協調主義的な現実があるという。「労働者は労働組合を組織して生活改善賃銀要求を為すほどに苦しんで居らぬ」¹⁰⁾。それに対して、知識階級やサラリアー

ト（月給取階級）、さらに被差別部落民が切実な生活改善の要求を持っているのが現状であった。

このような日本においては、資本家や富者が社会貢献として社会事業を行い、研究や文化事業の資金を提供することは当然のことでもあった。米田は、第一次世界大戦中に、大戦景気によって富を蓄えた成金についても時事的な論文を多く発表している。米田によれば、「成金」に対して、日本国民は矛盾する二つの評価をしていると指摘する。一方では「最も下劣な人物として……非難し賤しめ、蛇蝎の如くに嫌ひ憎悪して居る」のに、他方では「大いに」「尊崇」「憧憬」している、まさに「理想的人物」でもある。アンビバレントな成金への評価は「現代社会の実相を其の俛に反映」しているのであって、成金を一方的に批判・排除するのは無意味だという。現代は「人類発展史上物質的に最も進歩せる時代」であるから、成金をもたらした「物質主義」を拒否することは不可能である¹¹。成金の存在をマイナスに評価して道徳的に非難するだけでは、成金が日本社会の現在に発生した背景を理解したことにならない。この観点は、米田が様々な社会現象を考察する方法に共通するものであった。例えば、売春の存在も、女性の道徳的頹廢に起因すると見るだけでは不十分であり、「出来るだけ多くの利得を収むることを目的とする宮利主義」を本質とする現代資本主義の精神を反映しているのである。あるいは利那的享楽主義が男女の性的刺激を活性化するという心理的原因、さらにそれらに結びついて、売春組織を発達させていく社会集団の存在がある。こうしたことを踏まえて、売春問題を解決するためには、社会の中で男女の新しい性観念がつけられる必要があることを米田は強調する。成金についても重要なのは、蓄積した富を家財として世襲するような「我国伝来の富豪観念を打破して、新しい富豪観念を発達」させることで、成金の「大使命」を自覚させることだという。「富める家を造らんとする念を断然放棄して富める人格者となる可く修養」し「集積せる富を社会的に使用して国民の福利を増進し文化を発達させる」ことであった。「新しき日本にふさわしき諸般の文化的事業社会的事業は諸君の力によりて勃興するのである。諸君にしてよく自覚し新富豪道徳を發揮せんか、

米騒動や其他如何なる騒動も決して恐るゝに足らぬ。暴徒は諸君の家を焼かずして諸君の家を保護するであらう¹³⁾。

大原は第一次大戦期の成金の資本家ではない。しかし、先述した大原の富者・資本家としての使命の自覚に基づいて、社会科学研究に経済的支援を行うことは、戦後の「文化的・社会的事業」としてふさわしいものであった。米田にとつては、大原の支援が「道楽」であるかいなかに関係なしに、肯定できるものであった。『名古屋新聞』の新中産階級問題の連載でも「民本主義の大勢」を論じて、民本主義が「政治に於ては多数政治、輿論政治の実現」、「経済上に於ては資本家対労働者の関係を民本的に規定せむとするもので、利益配当の公正を期待する思想」とした¹⁴⁾。こうした観点から、米田は大原社研の開設にも積極的に関与することになった。

先述のように一九一九年一月の研究所設立趣意書は米田が起草したとされる。これが正しければ、高野の参加が不明なこの段階での米田の大きな役割が反映されていると考えられる。趣意書では、第一次大戦後、欧米と同様日本でも「思想方面に在りては民本主義的潮流」、「経済方面に在りては所得の不均衡より生ずる不安の状況が弥々甚しく」、「社会生活は根本的に動揺」する現状を指摘して「社会問題が既に現実の問題」となっていることを強調した。社会問題の實際を調査し、その解決の一端に資するため研究所の設立を行うとするが、同じ社会問題とはいっても「欧米の於ける實際の問題と、我国に於ける實際の問題とは、必ずしも全然軌を一にす可きに非ず」と、前引の新聞記事での日本と欧米の型の違いの指摘が反映されていて、米田の考えの一斑を踏まえたものであると推測できる。解決の方法も「我国は我国として行く可き道」があるとも述べているが、日本流の方法の中には、「民本主義」が前提にしていた「我が国体を傷つけ社会社会一般の幸福を害する事」のないようにとの制限¹⁵⁾も含まれていたのはいうまでもない。国体については『名古屋新聞』の前引の続きの部分で、「君民一致の仁政を施し給ひ、常に国民の中心になり給へる皇室」とのべて、米田が擁護する民本主義が「国体問題や皇室の安泰に就て、一毫も疑惑を有つてゐない」こと、解決すべきは「国体問題」

でなくして「生活問題、経済問題を如何とすべきや」であると強調していた¹⁶。このように趣意書の基本的な主張は米田の考えに沿っていたことが確認される。

もう一人の大原社研創設の指導者、高野岩三郎にとっても、社会問題の解決は研究生生活を方向づけた大きな課題であった。専門は経済学の統計を使った実証・理論の分野であったが、大原社研の創設の時期には東京・月島調査を指導していた¹⁷。二〇歳代の学生時代には東京の三大貧民窟と呼ばれた四谷鮫が橋、下谷万年町、芝新網町などを実地調査し、官公庁の統計資料と貧民地区の教師・家主や有力者との対話や地域の完全に取り組む帝国済民会の指導者の作成資料を使ったレポート「東京のイースト・ロンドン」(英文)を書き残している¹⁸。貧困層の階層分布、生活や雇傭の条件、子供の教育、犯罪などの心的条件、貧困の原因を検討している。その結論として、日本の貧民の状態は「悲惨ではあるが、その数はそれほど多くない」。日本では一般の生活水準が高くないから、イギリスほど「貧富の隔絶」は存在せず、「貧民が金持ちに敵意を抱いたり、現存の社会秩序に不満を感じていることを示す兆候はない」。しかし欧米のような工業化が進展する可能性を考えると、「現在は貧民の状態を詳細に科学的に調査をし、適切な貧民救済政策を考慮するための最善の時期」だと考えた¹⁹。こうした姿勢は二〇世紀に入っても継続していたと思われる。

先述したように、米騒動の発生の直前に、政府は救済事業調査会を創設する²⁰。その委員の一人として高野が任命された。その直後の『国家学会雑誌』に高野は調査会の姿勢に注文をつけた「救済事業調査会の重要任務」を発表した²¹。調査会の設立については高野の門下生で、大原社研の創設後、研究員などに就任する榎田民蔵や森戸辰男も『国家学会雑誌』『経済論叢』に掲載しており、高野の論文もそれらを受けたものであった。森戸は資本主義の発展に伴う労働者階級の発生と、中等階級の生活の圧迫を社会問題と捉らえて、労働問題に対応する社会政策の必要性を強調した。従って、恤救や防貧を連想させる救済を表面に掲げる調査会の不十分さと労働問題を中心に据えず、労働者の代表を参加させな

い政府の姿勢を批判した。⁽²²⁾

榎田民蔵も同様に、経済社会の変化によって、貧民問題、労働問題が発生することを指摘するが、貧困問題と労働問題は区別すべきことを強調する。「恩恵的にあらざる労働者保護」を「一括して救済問題」とし調査会に「救済」と名付けるのは不適切である。「労働問題は勿論貧困問題をとめない、したがって救済問題の対象となることはある。しかしそはむしろ二次的結果とも見るべき、これをもって該問題の本質を考うるをえない。前者(貧困)は常に社会又は個人の道義同情の問題であるが、後者は主として権利義務の問題にして、両者は理論上又は實際上区別し考うるべく、かつ区別するを至当とする」。榎田に特徴的なのは、社会政策の最重要課題として労働問題と並べて、部落問題の解決を挙げる。被差別部落の存在は「維新の政治的革命的残骸」であるのに社会政策の分野では「閑却」されている。これを最優先の調査に加えるべきだとした。⁽²³⁾

こうした論点の総てを高野は承認しているわけではないであろうが、基本的な考えは共有していた。救済の語句の救貧的な意味合いを「侮蔑的名称」と高野も批判し、「社会問題調査会」とすべきだと論じた。「一時的応急的」ではなく労働組合の合法化、労働条件改善など労働問題を重視することについても賛意を表している。「労働対資本の折衝問題に於ても権義の交渉、相互認識の上に立てる真正の妥協」を期待している。また議事・調査報告の公表の必要も求めた。⁽²⁴⁾ 調査会の中で、その実現に尽力したが、大原社研の開設に当たっては、当然に、これらの調査・改善が大きな柱となっていた。部落問題について、調査会の教化事業中に「細民部落の改善」が含まれていたが、更なる取り組みは調査会委員であった留岡幸助などにより主張されたし、大原社研の中でも京都市の部落調査が計画された。⁽²⁵⁾

(1) 河上肇についての研究は多いが、とりあえず、末川博編『河上肇研究』(筑摩書房、一九六五年)。

- (2) 河上肇より榊田民蔵への手紙と河上の手稿『榊田民蔵君に送れる書簡についての思ひ出』は大内兵衛によって、一九四七年、鎌倉文庫で刊行され、新版が一九七四年、法政大学出版局から発行された(大内兵衛・大島清編『河上肇より榊田民蔵への手紙』)。本稿では、「河上肇より榊田民蔵にに送りたる書簡集」として新たに編纂された『河上肇全集二四卷』(岩波書店、一九八三年)から引用を行う。以下『全集』と略す。
- (3) 一九二〇年四月一八日の榊田宛河上書簡の河上の註(以下「註」と記す)『全集』九四―九七頁。
- (4) 河上肇『貧乏物語』(一九一七年)『近代日本思想体系二三卷・河上肇』(筑摩書房、一九七七年)一九七―九八頁。
- (5) 本文で述べるように、河上と研究所の関係は明確でない部分がある。思い出の中では、高野の研究所への斡旋についても、河上によって、河田・米田)に了解を求める積極的な働きがあったことを示唆している。年月日不祥の榊田宛書簡で、国際労働会議の代表派遣を巡って、東大を辞職することになった高野の行く末について『東京日々新聞』や『朝日新聞』への入社を助言し「小生交渉の任に当」たるとし、「大原の社会問題研究所に腰をすえ」るつもりならば「小生河田教授等へ御相談致し、若干の骨折相試み可申候」と提案している。『全集』九二頁。
- (6) 久留間、前掲「学究生活の思い出」八四頁。
- (7) 米田庄太郎「我國の社会問題と基督教」『開拓者』二二―三六頁。
- (8) 米田庄太郎「第一回」資本主義時代』『名古屋新聞』一九一八年一月二三日。以降の連載のタイトルは「新田中産階級」貯蓄郵便の増加」「特種部落民問題」「民本主義の大勢」であった。本誌については、奈良県同和問題関係資料センター所蔵コピーの閲覧の機会が与えられた。同センターのご配慮に感謝します。「特種部落民問題」は『京都の部落史第七卷』(京都部落史研究所、一九八五年)五一―六一―一八頁に収録されている。
- (9) 勿論、米田は日本社会の特殊な型だけではなく欧米との共通性も指摘している。普遍的な共通性を前提にしつつ、発展段階の違いが日本の型と抱えられている。その点で、日本の固有の民族性に結びついたエスノ・ナショナリズムに埋没しない性格のものであろう。シヴィク・ナショナリズムとエスノ・ナショナリズムの対比については、Jonathan Hearn, *Rethinking Nationalism*, 2006, Palgrave MacMillan, pp.88-91 参照。
- (10) 米田、前掲「資本主義時代」『名古屋新聞』。
- (11) 米田庄太郎「成金の国民的使命」(一九一八年八月)『現代智識階級運動と成金とデモクラシー』(弘文堂書房、一九一九年)三二四―二七頁。
- (12) 米田庄太郎「現代性慾生活問題」『現代性慾生活問題』(中外新報社、一九一八年)一二頁。売春によって「貞操を破る女子が賤しむべき

ものならば、同じく男子も賤しむべきものである。貞操は男女ともに同様に之を守るべきものとした。米田庄太郎「現代文明と淫買問題」同著一〇八—〇九頁。

(13) 米田、前掲「成金の国民的使命」三二九頁、三七七—七九頁。ここでも日本の成金の性格は個人主義的な家族観・伝統に支えられた欧米の富豪との違いとして捉えられている。

(14) 米田庄太郎「民本主義の大勢」『名古屋新聞』一九一八年一月二八日。

(15) 大原社会問題研究所設立意書、前掲「大原孫三郎伝」一三六—三七頁。

(16) 米田、前掲「民本主義の大勢」『名古屋新聞』。

(17) 高野岩三郎の月島調査は『古典生活叢書第六卷・月島調査』（光生館、一九七〇年）に復刻されている。関谷耕一「解説」参照。月島調査に参加した三好豊太郎の講演筆記「月島調査について」（一九七九年）『草創期における社会事業の研究』（明石書店、一九八九年）がある。

(18) 高野岩三郎「統計学を専攻するまで」（一九四四年）鈴木鴻一郎編『かつぱの尻』（法政大学出版局、一九六二年）所収。六七—八七頁。高野は「学生時代に実地調査に興味を感じ、社会的統計研究にも幾分手を染めて」といると振り返っている。八七頁。

(19) 「EAST LONDON IN TOKYO」同右「かつぱの尻」八六頁。

(20) 救済事業調査会は、一九一八年六月二八日に、内務大臣の下に置かれた。社会事業家の留岡幸助、小河滋次郎、救世軍の日本人指導者・山室軍平、などが委員として参加した。調査項目、議案要綱・決議などについては「救済事業調査会報告」（内務省社会局、一九二〇年）社会福祉調査研究会編『戦前期社会事業資料集成』一七巻（日本図書センター）所収。同著の窪田暁子の解題、参照。

(21) 高野岩三郎「救済事業調査会の重要任務」『国家学会雑誌』三三卷九号（一九一八年）。一五三—一五七頁。

(22) 森戸辰男「救済事業調査会の設置と我が社会政策」『国家学会雑誌』三三卷八号（一九一八年）。

(23) 櫛田民蔵「救済調査会について」『経済論叢』七卷二号（一九一八年）、二七三—二七九頁。

(24) 高野、前掲「救済事業調査会の重要任務」一五五—一五七頁。

(25) 大島、前掲「高野岩三郎伝」一一二—一四頁。労働問題については「資本ト労働トノ調和ニ関スル施設要綱」で「労働組合ハ其自然ノ発達ニ委スルコト」とするなど法認の方向は明確にされなかった。労働保険、仲裁制度についても政府の調査を求めることに止まった。前掲「救済事業調査会報告」三〇頁。

(26) 部落問題については、救済事業調査会では中心的な議論とはならず、継続する社会事業調査会での課題に引き継がれる。大原社研の研究

の中でも、部落問題がそれほど重要とは考えられていないようである。しかし、救済事業調査会の課題が労働問題と部落問題にあるとした
榊田民蔵は、水平社設立後の一九三三年に「対角線上から見た水平社運動」(『我等』五卷五号)を著わし、河田嗣郎は大原社研辞任後の一
九二四年、「私は平素社会問題を研究してゐる者であつて、婦人問題、労働問題乃至は今日の所謂水平運動などについては、相当理解を有つ
てゐる」と語っていた。河田嗣郎「米国の排日問題と民族的水平運動」『文明大観』第五号(一九二四年一〇月)二三頁。

三 大原社研の分解―米田庄太郎の大原社研辞職

大原社会問題研究所は、経営問題とからんで、独立した自治機関とするという名目で財団法人化の方向が模索された。基本財産として、土地・建物を大原孫三郎は寄付し、さらに毎年の経費八万円を寄付するなど、一九二二年一二月一三日、財団法人として認可された。同時に組織を新たにし、常任理事が高野、幹事に高田が横滑りしたが、二人を支える委員としては、榊田、久留間、森戸、権田、細川と大林宗嗣が就任し、河田嗣郎や米田庄太郎、小河滋次郎、北沢新次郎は大原社研の評議員を辞職することになった。助手であつた植田、川西、林、山村、丸岡、八木沢善次も社研を退職させられる。『大原孫三郎伝』^①は、高野の所長就任後「最初から開設に尽力した京大出身の米田庄太郎、河田嗣郎が辞職をし」^②ため、榊田たちの研究員、嘱託就任で「研究所はさながら東大経済学部^③の亡命者の植民地の観を呈した」と簡単に述べている。この記述は米田と河田が「開設に尽力」したことは事実として触れている。辞職の経緯ははつきりさせていない。京大と東大経済学部の対抗が示唆されているようにも読める。大原社研の三〇年史などでは米田の開
設への尽力も殆ど取り上げられない。

『大阪朝日新聞』(二月二三日)は「大原社会問題研究所の革新」と題する記事を掲載して、社研の財団法人化にか
らむ社研内部の紛糾を報じている。見出しには「京大派と研究所派に分る」という文字もある。大原社研は「我国新思

想の学徒を集め有益な研究結果を漸次具体的に発表し始めた」と評価したうえで、財団法人化に伴う人員整理の事実を報じた。その狙いが「確固たる経済基礎の上にたつて当初の創立目的に進むために斯く大勇猛心を以て組織の変更を断行」することであると推測している。財団法人化については森戸辰男が研究所に関係することに内務省警保局の難色したことなど伝えている。記事はこの改革で「目覚ましい新陣容を整へて真実鞏固な研究活動の首途に赴く筈」との将来への予測をしながら、紛糾の背後に「見のがし難い学者間の思想的立場からの濃厚な然し潔い争闘が隠れてゐる」として、次のような経緯を紹介している。「研究評議員を辞した京大の米田庄太郎、河田嗣郎両博士は同僚の河上肇博士と以前から其の仲面白からず又所長高野博士とも今度の組織変更に関して議の合はぬために総てに嫌らず思つてゐたが、最近河上博士が遂に京大を去つて大原社会問題研究所に入るとの決意を聴き両博士はいよ／＼研究所と絶縁を宣するに至つた^④。この記事では、京大派と研究所派の対抗ばかりではなく、京大派の中にある、米田・河田と河上との対立を示唆している。

『大阪朝日』の記事に関連して、河上は榊田に書簡を送つた（二月二十五日付）。「私が研究所に係する事は無期延期」にし「追て事情の許す際に、私の方から申出」ることを提案した。「主観をいつも留保なくオープンに行動するので無いと、どうも落付が悪くて困ります。従て所（研究所）との関係についての最近の経過は、私にとつて可なり無理があり、心中何となく落付がなかつた」。最近の経過は書かれていない。「今日は之から河田君を訪問するつもりですが、如何に話してよいか、ウツが言ひにくい性分なので、可なり当惑して居る」と心情を吐露している。この書簡に付けられた河上の解題では「大原社会問題研究所の方では、河田米田二君を除き私だけに關係して貰ひたいといふ予てからの希望であつたが、同僚に対する義理合から私はいつも躊躇してゐた^⑥」と言う。他の書簡の解題には「河田米田両君が去られた後も、頻りに入所の勧誘を受け、後には評議員として關係するやうになつた^⑦」とも説明している。

大島清の『高野岩三郎伝』は河上と大原社研の関係について次のように説明する。「河上が、研究員として入所してもよいの意向を高野につたえた……高野はこれを歓迎してその後しばしば河上に会い、また櫛田を通じてその参加をすすめた。しかし河上の態度は完全に断るでもなく、かといって承知するでもなく、高野をいらだたせるばかりであつた。ここでは、河上の方から入所の意向を示したことになっている。「河上のこういう態度にはしかし、創設当初は大原研究所の中心にあり、やがて高野にその席をゆずるにいたつた京大の河田嗣郎や米田庄太郎らの心情と無関係ではないことに高野は気づいてはいた」。河上の躊躇の背後に高野は河田に所長の地位を譲るべきだという河上の不可能な願望を読み取る。「河田、米田と一緒なら研究員として参加しよう、という河上の意向には、高野も櫛田も反対であつた。こうして数年がすぎらうちに、河上の態度を見かねたように、高野のすすめもあつて、長谷川（如是閑）が研究嘱託になつたのである⁸⁾」。如是閑が研究嘱託になるのは米田たちが評議員を辞任する直前の二二年一〇月であるとする⁹⁾と、河上の大原社研との関係も米田・河田たちと同時期に断られたと思われ¹⁰⁾。

実際のところは不分明であるが、河上の記憶では、河田・米田とは別格で大原社研が河上を処遇しようとしたことになつており、二人への不義理で河上は躊躇をしていた。河上たちが社研を離れた筈の、一九二三年五月一七日付の櫛田宛書簡でも、朝日新聞関連の発行物に河上と大原社研の関係が云々されて「同僚から重ねて若干の質問を受けた」¹¹⁾こともあり、「研究所の初会議へ私が出席することを見合」¹²⁾わせると伝えた。河上は解題として「私が同研究所との関係を有つことが、どうしてさう執拗に要求されたものか、不思議である」と回想している¹³⁾。櫛田との関係もあり、大島の説明ほど河上との関係が遮断されたのではなく、処遇は曖昧なままであつたのかもしれない。

『大阪朝日新聞』は同日の夕刊（一二月二四日付夕刊）には一方の当事者である米田と河田のインタビュー記事が載せられている。河田の方は、評議員であつたのも「名義だけで学校の方が多忙」で責任を負えないから辞任したので「内

部に紛擾等があつたためではな¹²いと内部の対立を否定し、「密接な関係者で実務に当たる」のが目的だと無難な答弁に終始している。これに対して、米田はもう少し詳しく経緯を説明した。タイトルには「社会運動は廢めて／今後は純研究に／脱退説ある米田博士は語る」となっている。米田は前月大阪のホテルで評議員会があり財団法人化と、米田・小河・河上などの評議員が辞任し、理事として高野が就任した事実をのべ、これについては「何うの斯うの」という問題はない」とした上で、研究所の主眼が「これまでは研究の外に社会運動に携はるところもあつたがそれを絶対に廢めて今後は純研究に没頭」することを明確にしたという¹³。米田の認識では、社研創設の意義を研究だけではなく「社会運動に携はる」ことにも見いだしていたということであろう。趣意書にある研究・調査という「堅固なる基礎のうえに立脚して問題解決の一端に資する」という社会に対する働きかけを評価していた。勿論、米田が「純研究」の重要性を否定しているわけではない。大原社研の存在意義が社会運動の実践にもあつたことを再確認したのであつた。

「純研究」に集中する面では、大原社研に係わるのと同時進行的に、米田を取り巻く環境が大きく変化をした。既に述べたように、一九一四年に同志社専門学校の専任職を辞職し、京大の社会学講座を担当したものの非常勤講師であり、専門分野での論文発表にも大きな力を裂いていた。河田と河上は既に京大教授の地位を獲得していた。それが米田も一九一九年には京大の専任講師に就任し、二〇年には博士会の推薦で文学博士となり、京大教授に昇進する。帰国以来の実力の研鑽が社会的に一応承認されたということであろう。研究に専念出来る環境を持つことができた。「研究の外」の社会的活動としても、新聞や雑誌での論説発表以外にも、一九一五年に京都で開催された第三回全国慈善事業大会、一八年の内務省主催・感化救済事業京都府講習会の講師を務めたり、小河滋次郎の救済事業研究会での発表、山口や岐阜などでの講習会、第三高等学校基督教青年会での講演など、発言の機会も増えた¹⁴。その点では、大原社研という活動の場を失つても、それほど損失がないという判断があつたのかもしれない。

京大教授に米田の就任が遅れたことに関しては、米田が部落出身者であることが京大教授会で問題視されたことが、第二次大戦後、フランス文学者の桑原武夫が京大教授であった父親からの伝聞として明らかにした。¹⁵ 実際の事情ははっきりしない。大原社研の創設期においても、米田の出自についてはよく知られていた。例えば、宮武外骨が個人誌『ザツクバラン』で「新平民の名士」として米田庄太郎を名指しし、米田が自らの出自を公表することで被差別民の「自尊心」を促し、「普通民の旧弊の打破」に寄与することを訴えている。¹⁶ 内務省囑託の高島平三郎は奈良県公会堂での民力涵養講演会において、名は挙げていないが「我等が崇敬する世界的学者」である「一大学講師」が被差別部落出身であることに言及した。¹⁷ 被差別民の解放運動の中でも「卑下する勿れ吾等同胞よ」とする呼びかけの中に、「吾国社会学の權威にして京大講師文学博士米田庄太郎」を例示している。¹⁸ 京大教授就任の遅れについては、仏教系の新聞『中外日報』が「学識兼備の京大米田講師を部落出身だと言ふ処で何時迄経つても教授に推挙しないのは、何ぢや彼ぢやとデモくつて小指程を実行しきれぬ教授連の因循を物語る」と報じていた。¹⁹

米田はこうした出自を巡る議論については一貫して黙殺した。部落問題について語らなかつたわけではない。先述したように賀川豊彦の『貧民心理の研究』に米田は序文を書いている。賀川が、一九〇九年以降、神戸の貧困地域に住み着いて見聞した貧困者の心理や生理をまとめた作品である。²⁰ 貧民の中には被差別民も含まれており、偏見に基づく人種起源説の差別性が後に問題になった。米田の「序文」では「本書の研究法や材料に就ては、不完全なる点」があり、「著者の見解や、論証に就ては、余の賛成し難い点が多い」とするが、²¹ 具体的な論点を展開していない。米騒動直後の『名古屋新聞』の戦後の新中間層の抱える社会問題を論じた連載論説の四回目で部落問題を扱っている。その中では、政府が米騒動の原因を被差別民の「社会的反抗」に帰着させ、「その他の大部分の社会」が抱える「不安、不平」を無視している無責任を批判した。勿論、米田は、被差別民が「平日から現社会に対して不安、不平を有」つことを否定しない。

しかし「不平、不安」の原因を米田は触れない。ただ治安上からの危険を示唆する。幕末の大塩平八郎の乱を例示して、「彼等（被差別民）をして立たば実に由々しき大事」として部落問題を「輕輕に看過してはならない」という。実際、「彼等は統一あり、団結力あり、而して獐猛なる野蠻性を有つてゐる」のだ。²²被差別部落民は獐猛性を持つという言説は珍しいものではない。犯罪と不潔、怠惰な性格と結びつけて多く主張された。賀川もそうだし政府の被差別部落改善の政策に大きな影響を与えた留岡幸助の部落問題認識にも含まれていた。²³しかし、賀川や留岡がどちらかといえば、一般民と被差別民との精神的融和（国民として人間としての）を強調したのに対して、米田は精神的解決の欺瞞を剔抉した。被差別民が経済的貧困に陥り、差別／排除を受けている現実を踏まえて米田は言う。

「物質の困苦を救ふには物質を以てしなければならぬ。経済的困窮を除却するには経済力を以てしなければならぬ、筋途違ひの方法を以てしても、決して根本対症療法とはならぬ、社会問題は芸術では解決されぬ、経済問題は哲学の論理では解決されぬ、芸術や、哲学や、宗教などによりて精神的に解決し得る部分は極めて安価なる、末節の問題に過ぎない、近ごろ社会問題の精神的解決などと云つてゐるのは、社会問題の性質そのものを知らない人達の遊戯的議論である」²⁴。

被差別民が自らの解放を求める全国水平社が結成されるのは一九二二年三月であった。既に大和同志会など部落改善運動は展開し始めており、政府も内務省・留岡などが中心となった細民部落改善の施策（被差別民の修養・生活改善）などを行なっている。²⁵米騒動の前後の時点では、被差別民の「統一」や「団結力」は一般的な「事実」ではなかった。自身の出自をカムアウトしていない米田は水平社結成の動きや政府の政策について具体的に論じているわけではない。米田が述べた統一や団結力、部落問題解決の方法としての経済的視角といった観点は、被差別民の解放運動に対して米

田が持った「期待」あるいは「要請」であったのかもしれない。米田は学問の実力を養うことで、博士号と帝国大学教授というステータス・シンボルを獲得し、帰国以来の米田自身の期待を実現したのである。米田は告白する。「帰朝後、殊に京都帝国大学文学部に關係して以来、私の地位を保つ唯一の途は、只益々私自身の実力を養ふ外になかつたが為めに、日夜研学に力を集中」したのである。⁽²⁶⁾ 実力の養成によつて出自による差別／排除から解放する道を自らの生き方で示した。

京大教授就任の遅れに、彼の出自が関連しているかどうかは、分からない。しかし、個人的問題としては表明されてはいないが、部落問題の解決が米田の関心にとつて小さくなかつたことは、以上の叙述で明らかにされていると考える。米田にとつてだけではなく、社研創設の支援者、大原にとつてもそうであつたし、高野岩三郎は直接言明しなかつたが、そのブレンとも言うべき、櫛田民蔵は社会政策の根幹に労働問題の解決と部落問題の解決を特に強調している。研究所としても、部落の実態調査を手掛けようとしている。米田が社研に在職し続けたとして、そのような実態調査がさらに行われたかどうか、は分からない。大原が谷本富を通して、米田を紹介された時点で、先に述べたように、米田の出自については比較的よく知られたことであり、大原も知つていたことも考えられる。勿論、出自の問題が直接に、米田の京大教授就任の遅れや、大原社研退任の理由であつたわけではないであらう。

京大教授就任については、出自以上に、米田が日本国内で正式の高等教育を受けていないことが口実にされた可能性が高い。米田と同時期の京大の教授陣はほとんどが「文学博士・文学士」の学位を持つ。博士号は持つが学士号は持たない、つまり帝国大学正科の卒業生ではないのは、米田の外に教育学の谷本富、東洋史の内藤湖南、哲学の西田幾多郎などわずかである。谷本は、米田の支援者であり沢柳事件で京大を辞職する。内藤は辞職後の谷本と親交を続けた。⁽²⁸⁾ 西田と米田は、米田が戦時期大阪府下の能勢に疎開するまで交際があつた。⁽²⁹⁾ こうしたつながりの共通点に、学歴の問題が

見え隠れする。大原社研の米田の退職については、京大系と研究所派（東大系）という学閥の対立以上に、経済学と社会学との学問的方法に係わる対抗、とくに新興社会科学として社会学が安定した地位を得ておらず、大学の中でも低い地位に置かれていたことが重要であろう。³⁰⁾ 京大においても、社会学講座は哲学・教育学と並んで哲学科の中に置かれ、その点で同じ学科の同僚として、米田は西田とも親交を結ぶが、教育・哲学は早くから専任教授が置かれたが、社会学は米田が非常勤講師として講座を担当したが、一九一九―二〇年に専任の講師／教授となった。二五年に米田が早々と教授を退職すると、西田が代講したりして、しばらく専任教授が置かれなかった。米田は社会学の向上のために社会学講座担当直後に学会を立ち上げ、終生の課題として「社会学の体系化」を試みなければならなかった。³¹⁾ 社会学への低い評価が、米田の出自と併せて、米田の処遇に対する差別となったことも考えられる。

- (1) こうした経緯は、前掲『大原社会問題研究所三十年史』、後掲『大阪朝日新聞』などによる。
- (2) 前掲『大原孫三郎伝』一四四―四五頁。
- (3) 河上肇も思い出の中で「創立後間もなく意見か感情かが合はなくなつて、河田君も米田君も関係を絶たれ、研究所は謂はば東京帝大関係の人々が占領することになつた」としている。河上、前掲一九二〇年四月一八日榑田宛書簡への「註」、『全集』九六頁。合わなくなつた「意見」や「感情」についてはふれられていない。
- (4) 『大阪朝日新聞』一九二二年二月三日。
- (5) 河上肇、榑田宛書簡一九二二年二月二五日。『全集』一一三頁。
- (6) 河上、同右「註」一一四頁。
- (7) 河上、前掲一九二〇年四月一八日榑田宛書簡「註」『全集』九六頁。
- (8) 大島清、前掲書 一四四―四五頁。
- (9) 前掲『大原社会問題研究所三十年史』四八―九頁「河上、長谷川両氏の入所問題と助手の解職」でも同様の記述がある。一九二二年一月二三日河田、米田、河上は評議員を「自然解職」となったが三年秋に米田、河田を研究所の嘱託にする条件」での復帰の意向を示した

という。

- (10) 河上肇、櫛田宛書簡一九二三年五月一七日。『全集』二二二頁。
- (11) 河上、同右「註」一二二頁。
- (12) 『大阪朝日新聞』一九二三年二月二四日夕刊。「河田博士談」。
- (13) 『大阪朝日新聞』同右夕刊「社会運動は廢めて／今後は純研究に」。
- (14) 米田の社会事業についての発言は、同志社時代に、同志社出身の社会事業家・留岡幸助の個人誌『人道』に「犯罪学研究資料」（一九〇六年）を始め、本文で触れた社会事業関係の大会・研究会・講習会に協力した。発表の内容はそれぞれの機関誌に掲載された。例えば、「最近社会運動の趨勢」『救済研究』二巻五号（一九一四年）、「浮浪人の科学的研究」『慈善』七巻三号（一九一六年）。大谷大学の講師を勤めた関係から浄土真宗大谷派の社会事業雑誌にも、論文・講演筆記を掲載した。「現代文明と貧窮問題」『救済』二編一号（一九二二年）、「現代無産階級の発生」同九編一号（一九一九年）などである。米田の社会事業、社会運動についての思想的分析は後稿の課題としたい。
- (15) 桑原武夫「人間の戦い」『部落問題』一四号（一九五〇年）。
- (16) 宮武外骨「新平民の名士」『ザツクバラン』（一九一五年五月）。宮武は暴露雑誌を次々に発行して、その中で部落差別も取り上げている。『ザツクバラン』もその一つであるが、これに続いて『新平民雑誌』「機多」を一九一五年一月に発行し、「米田先生の結婚談」と題するゴシップ記事を掲載した。米田が出自を隠蔽することで「現社会の非条理を打破すべき精神に背」いていると非難した。『新平民雑誌』については、白石正明「宮武外骨小論」『部落解放研究』四号（一九七五年）で資料として紹介されている。宮武は一九一九年に発行する『民本主義』第一号には、『大阪毎日新聞』から米田庄太郎の論文「社会民本主義に過激的と温和的との二つあり」を転載している。
- (17) 『奈良新聞』一九一九年六月一〇日付。この記事については八箇亮仁氏の御教示を得た。記して感謝します。
- (18) 阪本紫舟「卑下する勿れ吾等同胞よ」『警鐘』二号（一九二〇年）。『警鐘』は奈良県磯城郡の被差別部落で結成された「三協社」の機関誌。復刻版がある（不二出版、一九八八年）。松尾尊発「解題」、同『大正デモクラシー』（岩波書店、一九七四年）参照。
- (19) 『中外日報』（一九一九年三月八日）前掲「京都の部落史第七巻」一九一頁。
- (20) 米田と賀川の具体的な関係は分からない。賀川の部落問題認識の特徴、問題点については、田中和男「大正期キリスト者の部落問題認識」『部落解放研究』一四七号（二〇〇二年）で簡単に触れている。鳥飼慶陽は、賀川が一九一七年五月の帰国後、米田を訪問し、その後も「友愛会の運動や協同組合運動を通して、ふたりの関わりは深まることになる」とするが、典拠を示していない。鳥飼慶陽「賀川豊彦の贈り物」（創

言社、二〇〇七年) 一〇六一〇七頁。

(21) 米田庄太郎「序文」賀川豊彦「貧民心理の研究」(警醒社、一九一五年)。土肥昭夫は米田の批判の対象に賀川の部落問題観が含まれたと推測している。土肥昭夫「賀川豊彦論」『歴史の証言』(教文館、二〇〇四年) 四〇九頁。鳥飼、前掲書参照。

(22) 米田庄太郎「特種部落民問題」『名古屋新聞』一九一八年一月二七日。

(23) 留岡の部落問題認識については、藤野豊「留岡幸助と部落問題」部落解放研究所編『論集・近代部落問題』(解放出版社、一九八六年)、田中和男「キリスト者と水平社」秋定・朝治編『近代日本と水平社』(解放出版社、二〇一二年)。

(24) 米田、前掲「特種部落民問題」。

(25) この時期の政府の対応や融和運動の動きについては藤野豊『同和政策の歴史』(解放出版社、一九八四年)、秋定嘉和『近代日本の水平運動と融和運動』(解放解放・人権研究所、二〇〇六年)。

(26) 米田庄太郎「ドーマン先生」松島篤編『ドーマン師追憶録』(教会時報社、一九三三年) 二〇頁。

(27) 『京都帝国大学文学部三十周年史』(京都帝国大学文学部、一九三五年) 二五一頁以下の「現職員」「旧職員」の一覧表を参考。

(28) 谷本と内藤の関係では、一九二七年一〇月二日、京都市公会堂で開催された谷本富還暦記念会に、内藤は発起人の一人として参加し祝辞を述べた。米田、米田の同志社時代の同僚の和田琳熊も参加した。高田保馬は発起人になっているが当日は参加していない。『梨花回咲』(谷本博士還暦記念会誌) (一九二七年)。

(29) 西田幾多郎「日記」『西田幾多郎全集』一七卷(岩波書店、一九六六年)は簡条書的な日記であって、詳しい内容の記載は殆どない。米田の名前は、一九一一年から四四年までの長期間に、かなり頻繁に登場する。一九二〇年五月二五日条には「午後哲学科会議、米田君の件定まる」とあり、米田の教授就任が承認されたことが窺われる(七月五日就任)。原勝郎(桑原の論文のH教授と考えられている)との関係では、一九二二年五月三日、「午後教授会、原君に社会学の件を話す」、五月一四日「深田君来訪、沢村講座の話あり。原君の態度憤慨すべし」などとなり、学部長を勤めていた原と西田らとの緊張関係が窺われる。

(30) 社会学の地位については、師・高田保馬を通して米田を意識している数理経済学者である森嶋通夫の証言が興味深い。森嶋は「社会学を勉強したかった。しかしそのような分野は経済的に自立することが一私の若い時代には一困難であった」という。高田保馬の『社会学原理』や『社会と国家』を読んだりしていたが、社会学を学ぶことに反対する父親との妥協で、「社会学者の高田保馬が経済原論を教えていた」京大経済学部に入学したという。森嶋通夫『ある人生の記録』『森嶋通夫著作集』別巻(岩波書店、二〇〇五年) 七頁、三四頁など。「経済的

に自立することが困難」との評価には、卒業後の就職の可否の問題と、学問自身の独立性が含まれている、と思われる。

(31) 米田自身による社会学の体系化は、京大時代にも完成されない。一九二五年の京大辞職に際して、「専ら社会学体系の編纂に努力」する意欲が確認されている。『教会時報』一九二五年四月一日号の米田の近況報告。『教会時報』は聖公会系の機関誌。彙報欄に米田が属する京都聖マリア教会の動向が紹介されている。米田関係の時報の閲覧については奈良県立同和関係資料センターの便宜を得た、記して感謝します。

むすびにかえて

米田庄太郎が教授に就任するころ、雑誌『解放』は「現代日本に於ける社会学の権威者を、単に一講師として京大が有する」不合理を指摘したうえで、米田がこうした外からの評価には関係なく「冷々然としてひたすら研究の生を楽しんでゐる」様子を好意的に描いている。⁽¹⁾半年後の同誌は同じ「京都大学の人々」と題して村松正俊が、河上肇、米田庄太郎、西田幾多郎、佐々木惣一を取り上げて論じた。⁽²⁾当時の京都帝国大学の代表的学者ということであろう。河上については、「新学説の創始者にあらずして、西欧思想の輸入者」であるという。学者として「研究の材料として、あらゆる資料を求め、之を知」ろうとする「学的要件に忠実である」とする。従って、自らを恒星とはせず、惑星と考えて自分は「太陽ではない、太陽はマルクスである」としつつ「自己の立場をもつ」態度は評価される。その反面「その学問全体を外から批判するところに欠けていないであらうか」との疑問を呈する。河上が『貧乏物語』下編の不十分さを正して『社会主義管見』を公刊した事情に触れて、全体としては河上の思想の変化を肯定的に紹介している。⁽³⁾

米田については厳しい批評を行った。村松によれば、端的に言って、米田は「偉大なる所有者」に止まるといふ。確かに、米田は「横文字を縦文字にする」だけの「蓄音機的思想家」ではない。「氏は偉大なる学問の貯蔵家であり、さうしてそれが単に貯蔵と紹介に止まることの多いのを遺憾としなければならない。氏が哲学を説き、社会学を講じ、経

済学を論じ、法学を学ぶところまことに行くとして可ならざるところのないものがある。さうしてその堅実なる諸学の知識は、さらに氏をして、学問のよろづやたることを感ぜしめる。氏の一個の論を行るとき、その引例は該博であり、論ずるところは広大である。しかもそれが氏自身が何物を示してゐるかを験するに及んで、われらはそのあまりに貧弱なるに驚かざるを得ない⁽⁴⁾。米田はあらゆることを知っているかのようなのである。外国語も多くマスターし、原文で最新の欧米の理論を一応把握していたともいわれる。その点で、知的にはあらゆるものを所有している。しかし、お前は誰だ。何をしたいのだということへは回答がない、ということであろう。所有ではなく、米田の存在根拠（アイデンティティ）が問題となる。あるいは所有する知識の内実が問われている⁽⁵⁾。

しかし、米田はそれに対して正面から答えなかった。米田にとつては、知識を所有・蓄積することが、実力を養う基盤であり、実力を持つことが何物かになることであつた。それが彼の自己実現であり、いわば出自やアイデンティティを問題視する差別からの解放であつた。

(1) 「京都大学の人々」米田庄太郎博士『解放』一九二〇年一〇月号。

(2) 村松正俊「京都大学の人々」『解放』一九二一年五月号。

(3) 村松、同右、八六一―八八頁。

(4) 村松、同右、八八一―八九頁。

(5) 同じような質問は、アナキスト大杉栄からも米田に発せられた。大杉は博士号が授与された「新文学博士米田庄太郎」の著作『晩近社会思想の研究』がアメリカの学者の翻訳に過ぎないとし、知識人が「知識を売って食っていく」姿勢を批判した。大杉栄「革命的サンチカリズムの研究」『労働運動』二巻五号（一九二〇年）。

付記

本稿は第五回原田伴彦部落史研究奨励金の助成による研究成果の一部である。内容の格子は財団法人世界人権問題研究センター（二〇〇四年一〇月二三日）、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会（二〇〇四年一月五日）で報告させていただいた。機会を与えられた諸機関と関係者に感謝します。

大原社会問題研究所の設立と米田庄太郎

同志社法学 五九卷二号

四七九（一〇四九）